

第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会
上級レベルの専門日本語教育－理論と実践－

報告書

大阪大学 国際教育交流センター
2014 年（平成 26 年）2 月 17 日

第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会

目 次

はしがき	沖田 知子	1
プログラム		2
背景および趣旨		3
講演1：内容重視の言語教育（CBI）の上級日本語教育への文脈化について		
	大阪大学大学院言語文化研究科 助教 横井幸子	5
講演2：ビジネス日本語教育の理念と実践 -日本語上級レベルの場合-		
	政策研究大学院大学 准教授 近藤 彩	15
講演3：上級日本語教育における言語景観を活用した社会理解教育		
	大阪大学国際教育交流センター 特任准教授 磯野 英治	33
全体討論		
	記録（文責：大谷 晋也）	53
写真： 協議会風景		61
付録： 過去の大阪大学専門日本語教育研究協議会の開催状況		64

はしがき

国際教育交流センター センター長 言語文化研究科 教授

沖田 知子

本協議会は、本センターが留学生センターであった2007年に第1回を開催し、本年度無事7回目を迎えることができました。これまで、アカデミック・ライティング、キャリア形成、日本語教育のスタンダード、研究留学生のための専門日本語教育といったテーマを年ごとに設定し、留学生や、留学生の指導教員の先生方を招いてのパネルディスカッション、広く学内外の研究者の方々をお呼びした最先端の研究発表や実践報告等、専門日本語教育に関わる議論を蓄積してまいりました。

昨今のグローバル化に伴い、大学における国際化をめぐる動きが一層加速する中で、留学生の在学段階や日本語レベルはさらに多様化しつつあります。特に、来日前に母国等の大学やその他の教育機関での日本語学習歴を有する上級レベルの学習者は増加する一方です。上級レベルの学習者は、学部か大学院かといった在学段階や漢字圏・非漢字圏といった母語背景の差異、各自の専門分野、およびその後の進路選択の差異によって、必要とする日本語能力も多様であるといえます。以上のような背景をもとに、本年度の第7回協議会においては、上級レベルの専門日本語教育を主なテーマとして設定し、情報や意見の共有を行い、かつ、今後の教育・研究への示唆を得たいと考えました。

本協議会においては、コンテンツベースの言語教育(CBI)、ビジネス日本語教育の各々の観点からの専門日本語教育への示唆について、専門家を講演者としてお迎えし、ご講演をいただきました。また、国際教育交流センターからも上級専門日本語教育の一つの可能性として言語景観を利用した社会理解教育について発表をいたしました。また、当日は53名という多数の参加者を得て、有意義な交流が行われたこと、心より感謝いたします。

国際教育交流センターでは、日本語教育研究チーム、短期プログラム開発研究チーム、交流アドバイジング研究チーム、そしてサポートオフィスの3チーム1オフィスによる4WD体制によって、大阪大学の国際化というミッションに取り組んでおります。その中で日本語教育研究チームは、昨年度までは科研の共同研究として阪大日本語教育のスタンダード化、すなわちOUスタンダードの実践と研究を行い、基礎日本語教育と専門日本語教育の両面で教材やカリキュラムの開発に取り組んでまいりました。また来年度からは、上級専門日本語4科目を単位あり大学院生向け科目として全学教育推進機構で開講することになり、基礎から上級にわたる全てのレベルで、OUスタンダードの確立を目指しております。本協議会で得られた知見を、今後の教育・研究活動に活用していく所存です。

第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会

日時：2014年2月17日（月）13:00～17:00（予定）

場所：大阪大学吹田キャンパス ICホール2階 ROOM 5&6

主催：大阪大学国際教育交流センター

第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会 上級レベルの専門日本語教育－理論と実践－

総合司会 国際教育交流センター 教授 村岡 貴子

13:00～13:05 開会の挨拶 国際教育交流センター センター長 沖田 知子

13:05～14:00 講演1：内容重視の言語教育（CBI）の上級日本語教育への文脈化について
大阪大学言語文化研究科 助教 横井幸子

14:00～14:55 講演2：ビジネス日本語教育の理念と実践－日本語上級レベルの場合－
政策研究大学院大学 准教授 近藤 彩

14:55～15:10 休憩

15:10～16:05 講演3：上級日本語教育における言語景観を活用した社会理解教育

大阪大学国際教育交流センター 特任准教授 磯野 英治

全体討論司会 国際教育交流センター准教授 西村 謙一

16:05～16:55 全体討論：上級専門日本語教育の今後の展開に向けて

16:55～17:00 閉会の挨拶 国際教育交流センター 副センター長 有川 友子

第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会 上級レベルの専門日本語教育－理論と実践－

背景および趣旨

昨今のグローバル化に伴い、国や地域を超えた人の動きが激化しています。大学においても、国際化をめぐる動きは一層加速しており、留学生も多数来日しています。そういった急増する留学生は、在学段階や日本語レベルがさらに多様化し、来日前に、母国等の大学やその他の教育機関での日本語学習歴を有する上級レベルの学習者は増加する一方です。上級レベルの学習者は、学部か大学院かといった在学段階や漢字圏・非漢字圏といった母語背景の差異から、各自の専門分野、およびその後の進路選択の差異によって、必要とする日本語能力も多様であると言えます。

以上のような背景をもとに、本年度の協議会においては、特に上級レベルの専門日本語教育を主なテーマとして設定し、情報や意見の共有を行い、かつ、今後の教育・研究への示唆を得たいと考えました。

第7回協議会においては、コンテンツベースの言語教育(CBI)、ビジネス日本語教育の各々の観点から、専門日本語教育への示唆について、専門家を講演者としてお迎えし、ご講演をいただきます。

また、国際教育交流センターからも上級専門日本語教育の一つの可能性として研究発表をいたします。

この機会を通じて、上級専門日本語教育の現状における問題点を共有した上で、課題と展望について活発なディスカッションが展開されることを期待しております。

講演1：内容重視の言語教育（CBI）の上級日本語教育への文脈化について

大阪大学大学院言語文化研究科 横井幸子

本発表では、内容重視の言語教育（Content-based Instruction: 以下 CBI）の、日本の大学における上級日本語教育への文脈化について考察する。語学教育という枠組みで、どのような“内容”をどのように選ぶのか？ またその内容をどのように評価に加えるのか？ 上級日本語教育という文脈における“内容”の選定と導入、評価の方法について、CBIのカリキュラム開発の手順や国内外の実践例の紹介、理論的考察を交えながら検討する。

講演2：ビジネス日本語教育の理念と実践－日本語上級レベルの場合－

政策研究大学院大学 近藤 彩

本発表では、日本語上級レベルを対象にしたビジネス日本語教育の理念と実践について述べる。日本語非母語話者が日本語を使用して仕事を行うには、どのような能力が必要か、何ができないとしないのか。日本人と共に課題を遂行するにはどうすればいいのか。国内外での企業調査、大学での教育実践、企業での研修を踏まえ開発された教材を例に、パラダイムシフトを提案する。

講演3：上級日本語教育における言語景観を活用した社会理解教育

大阪大学国際教育交流センター 磯野英治

本発表では看板やポスター、掲示物など身近にある生の日本語（言語景観）を通して、社会の諸特徴に気づき、かつ、大学で学ぶための分析力を獲得するための上級専門日本語教育について、その内容と実践を報告する。日本語上級レベルの学習者がその言語能力を生かし実生活の中で建設的、或いは批判的に社会を考察するために必要な観点を、国内外の日本語の言語景観に関する事情と授業実践から検討する。

講演 1

内容重視の言語教育(CBI)の上級日本語教育への 文脈化について

横井 幸子

大阪大学大学院言語文化研究科 助教

内容重視の言語教育(CBI)の 上級日本語教育への 文脈化について

第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会

2014年2月17日

言語文化研究科 言語社会専攻

横井幸子

発表内容

- CBIとは？
- 様々なCBIモデル
- CBIユニットの開発手順
- 評価方法
- 実践例の紹介
- 上級日本語教育への文脈化

語学教育における“内容”の問題

→語学教育の枠組みの中で、どのような“内容”を選択し、教え、
評価するのか？

内容重視の言語教育

CBIとCLIL

- Content-based Instruction (CBI)
北米のイメージングプログラムを中心に1965年位から発展 (Brinton, et al., 1989; Tedick & Cammarata, 2012)
- Content and Language Integrated Learning (CLIL)
ヨーロッパを中心に1990年代半ばから発展 (Tedick & Cammarata, 2012)

Content-based Instruction (CBI)とは？

“内容学習を通じて言語を学ぶ” (Met, 1991)

e.g., 日本語で数学を学ぶ、日本語で理科を学ぶ

“目標言語は、学習対象というよりも、学科内容を学習するために必要な伝達手段、媒体である” (Brinton et al., 1989, p. 5)

“非言語的内容を、第2言語、継承語、先住民の言語、あるいは外国語として学んでいる言語を介して教えるための、カリキュラムと指導のアプローチ” (Tedick & Cammarata, 2012, s28; Lyster & Ballinger, 2011, pp. 279-280も参照)

言語面と内容面のバランスを考慮し、それをカリキュラムと指導に明示的に反映させていくアプローチ

様々なCBIモデル

言語面と内容面のバランスの取り方

内容重視



言語重視

イマージョ
ン

Sheltered
Courses

Adjunct
Model

Content
Theme-
based
courses

ビジネス
日本語

CBIの特徴

Brinton et al (1989), Met (1991) など

1. 内容から出発する

何らかの新しい情報を得るために、目標言語を用いる

2. 生 (authentic) のタスクと資料を用いる

学習者の習熟度に応じて、テキストの修正、加工等は必要

CBIユニットの開発の流れ

1. テーマと目標を設定する

- 言語到達度基準と照らし合わせながら、生のテキストを選び、内容、言語面の全体の目標を設定する

2. 目標達成を評価する方法を決める

- 内容と言語の両面を評価に含める
- 形成的評価（小テスト等）と総括的評価(IPA)

3. 目標達成のための学習プロセスをデザインする

- 目的を言語面、内容面で具体的に明示する
- 3つのコミュニケーションモードをバランスよく、効果的に用いた活動を計画する
- グラフィックオーガナイザーなどを活用しながら、より高次の思考を促すような活動をデザインする

生のテキスト例

- 統計資料
- インフォグラフィックス

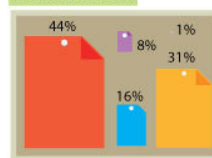
Как распределены обязанности в семье

Всероссийский центр изучения общественного мнения представляет данные о том, как распределены обязанности в среднестатистической российской семье

Как в вашей семье распределяются следующие обязанности?
(один ответ по каждой позиции)

Жена
Муж
Совместно
Нет такой обязанности в семье
Другой член семьи

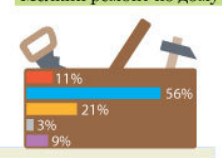
Оплата счетов



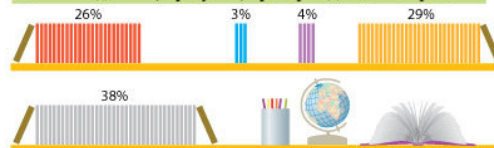
Покупка друзьям, родственникам, коллегам подарков



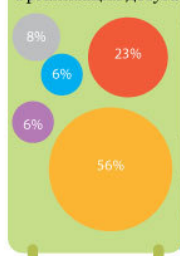
Мелкий ремонт по дому



Занятия с детьми, прогулка, проверка домашней работы



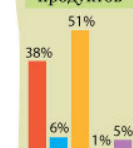
Организация досуга



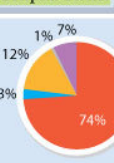
Глажка вещей



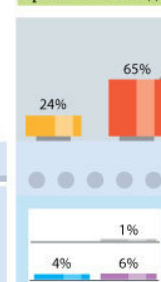
Покупка продуктов



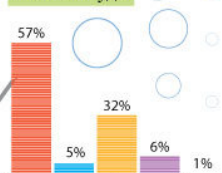
Стирка белья



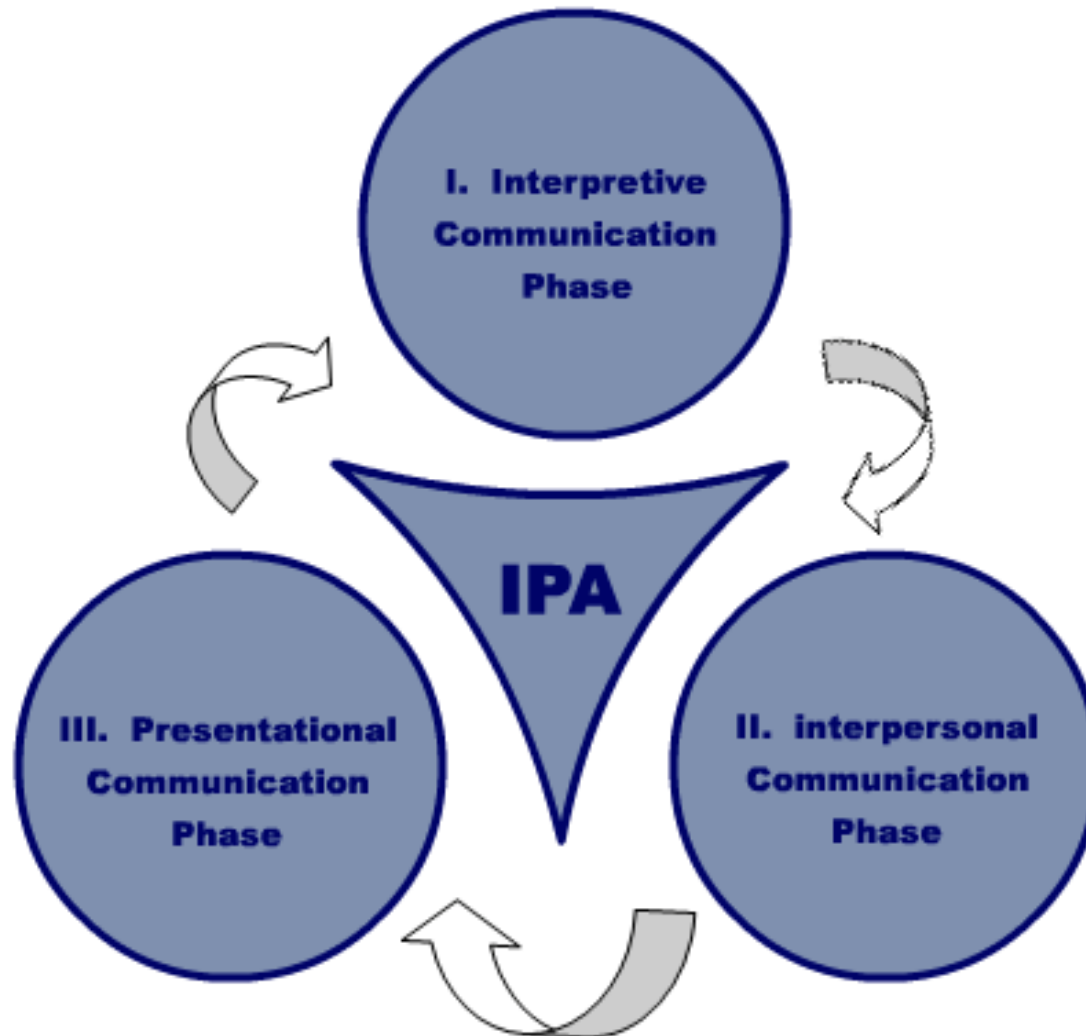
Приготовление еды



Мытье посуды



評価方法： Integrated Performance Assessment (IPA)

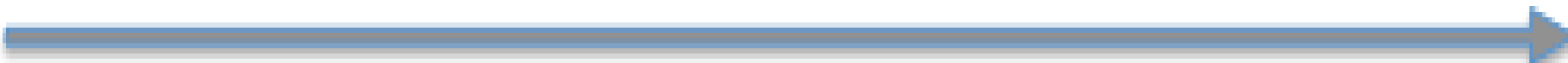


授業での工夫

- 学習者の既に持っている知識を効果的に使う
- 各授業を、既習事項の復習、新出事項の学習と応用で構成する
- 読む、聞く、書く、話すの4技能を別々に扱うのではなく、いくつか組み合わせた活動を計画する
- Scaffolding
- グラフィックオーガナイザーを活用し、より高次の思考を促すような活動を取り入れる
- 文脈の中でことばを使用する
- 学習者のレベルに合わせたインプット
- 学習者の発話を最大限に確保する
- 誤りに対して効果的にフィードバックする
- Learning Strategies

より高次の思考を促す活動へ

◎ブルームによる思考の分類（改訂版）



記憶 Remembering	理解 Understanding	応用 Applying	分析 Analyzing	評価 Evaluating	創造 Creating
認識する 列挙する 描写する 一致させる 名称を言う 定義する	説明する 分類する 例を出す 要約する	実践する 実行する 使用する	比較する 整理する 概略化する 発見する 構成する 統合する	確認する 仮定する 判断する 検証する 検討する	作る 設計する 構築する 計画する

（渡辺、池田、和泉、2011, p. 25）

Graphic Organizers

5Ws

Cause and effect Flow Chart

Cause and Effect: Multiple Causes

Comparison & Contrast Chart

Concept Ladder

Decision-Maker's Flow Chart

Factual & Complex Questions

The Fishbone

The Frame

Gathering Grid

KWPL

PMI

Prediction Tree

Problem Solving Chart

Question Matrix

The Scales

Structured Overview

T-Chart

Timeline

Venn Diagram

Thinking Skills

alternative-seeking

analyzing

brainstorming

categorizing

cause/effect

comparing/contrasting

decision-making

evaluating

gathering

inferring

inquiring

investigating

listing

predicting

priority-setting

problem-posing

recalling

sequencing

specifying

summarizing

実践例

Crandall & Kaufman (2002)

- Adjunct courses -- テンプル大学日本校
- Sheltered courses -- 宮崎国際大学
- English for Academic Purposes -- Northern Arizona University
- **Theme-based units → Adjunct Model -- UCLA**

Stryker & Leaver (1997)

Barnes-Karol & Broner (2010) – St. Olaf College

上級日本語教育への文脈化

- 日本語の生のテキストの取り入れ方
- 学習者の多様なバックグラウンドを考慮した内容(テーマ)の選定
- 内容も評価する
- プログラム全体のカリキュラムとしてどのように、どのような内容を“調達する”のか

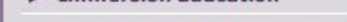
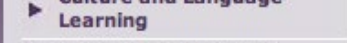
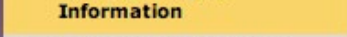
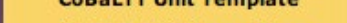
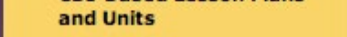
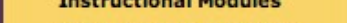
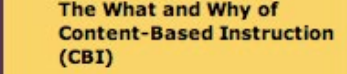
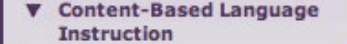
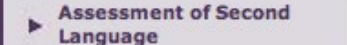
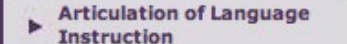
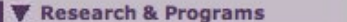
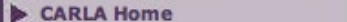
<http://www.carla.umn.edu/cobalttp/index.html>

 UNIVERSITY OF MINNESOTA

Search CARLA Web site

 CARLA CENTER FOR ADVANCED RESEARCH ON LANGUAGE ACQUISITION







Content-Based Language Teaching with Technology

CoBaLTT provides professional development and online resources that help foreign language and immersion teachers create content-based lessons/units using technology to enhance students' language proficiency and content or cultural knowledge.

The What and Why of Content-Based Instruction (CBI)

Read about what CBI is and why it has been identified as a highly effective curricular approach in the field of language education.

CoBaLTT Instructional Modules

Visit the CoBaLTT online instructional modules, which were designed to support face-to-face instruction on CBI and provide information about and resources for the main topics. Even those teachers who are not implementing CBI should find many of the resources useful.

- National Language Standards
- Principles of CBI
- Curriculum Development for CBI
- Instructional Strategies for CBI
- Assessment for CBI
- Technology for CBI

CBI-Based Lesson Plans and Units

Browse the lesson plans and units developed by CoBaLTT participants and other teachers of many levels and languages.

参考文献

- Barnes-Karol, G., & Broner, M. A. (2010). Using Images as Springboards to Teach Cultural Perspectives in Light of the Ideals of the MLA Report. *Foreign Language Annals*, 43(3), 422–445.
- Crandall, J., & Kaufman, D. (Eds.).(2002). *Content-based instruction in higher education settings*, Alexandria, VA: TESOL.
- Glisan, E. W., Adair-Hauck, B., Koda, K., Sandroock, S. P., & Swender, E. (2003). ACTFL integrated performance assessment. Alexandria, VA: American Council on the Teaching of Foreign Languages.
- Lyster, R., & Ballinger, S. (2011). Content-based language teaching: Convergent concerns across divergent contexts. *Language Teaching Research*, 15(3), 279-288.
- Met, M. (1991). Learning Language through Content: Learning Content through Language. *Foreign Language Annals*, 24(4), 281-295.
- Stryker, S. B., & Leaver, B. L. (Eds.). (1997). *Content-based instruction in foreign language education: Models and methods*. Washington DC: Georgetown University Press.
- Tedick, D. J., & Cammarata, L. (2012). Content and Language Integration in K–12 Contexts: Student Outcomes, Teacher Practices, and Stakeholder Perspectives. *Foreign Language Annals*, 45(s1), s28–s53.

講演 2

ビジネス日本語教育の理念と実践 ー日本語上級レベルの場合ー

近藤 彩

政策研究大学院大学 准教授

ビジネス日本語教育の理念と実践 ー日本語上級レベルの場合ー

近藤 彩

政策研究大学院大学
akondoh27@gmail.com

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

1

(1) ビジネス日本語教育

2010年「グローバル元年」



- 外国人の採用を増やせば、企業がグローバル化するのか
大学はどのような人材を育成する必要があるのか
- ・外国人と日本人間のコミュニケーション上の問題は？
 - ・教育現場と職場で起きていることの乖離は？
- モデル会話通りに仕事は進むか？

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

2

仕事上求められる行動

アジア人財修了生の外国人社員に対する
質問紙調査の結果 n=181

- ・仕事上の問題点を分析して発見する
- ・チームで仕事をする時の自分の役割を理解する
- ・上司からの指示を守る
- ・相手の意見をよく聞く
- ・チームで仕事をする時の自分の役割を理解する
(いずれも9割以上)

(海外技術者研修協会2008)

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

3

企業へのインタビュー 1

- ・日本語主専攻の学生は、日本語はうまい
ただ、仕事ができるとは限らない。
- ・日本語ができる人と仕事ができる人のどちらが
いいかと聞かれれば、間違いなく仕事ができる
人がほしい。
- ・仕事で問題が起こったときも、粘り強く解決して
いける人がいい。

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

4

企業へのインタビュー 2

- ・敬語が過剰な傾向がある
- ・日本人同士の会話についていくのが難しい



日本語教育の現場では
どのように**人材育成**をすればいいのか？

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

5

企業に必要な主な能力

- ・課題達成能力
 - ・問題発見解決能力
 - ・異文化理解能力
- **協働力**



(近藤2005、2009、
堀井2008、近藤・金2010他)

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

6

どのような人材を育てる必要があるか

“即戦力”

“仕事ができる”人材



課題を達成すること → 課題達成能力

問題を発見し解決すること → 問題発見解決能力

背景の異なる人と → 異文化理解能力

協力して働けること → 協働(する)力

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

7

教師は仕事の現場に目を向ける

●何が起きているのか: 行動中心のアプローチ
課題は何か?



課題を達成するプロセスで日本語を学ぶ

具体的な行動を通して種々の課題と取り組み
ながら言語能力を獲得していく

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

8

従来のビジネス日本語教育:
日本語を学習してから職務に就く



Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

9

これからの日本語教育:
職務遂行のプロセスで日本語を学ぶ



Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

10

(2) 教育実践: 2つのアプローチ

1) 現実的な活動から学ぶ

現実的なビジネス上のコミュニケーション活動を
体験し、内省する

2) 事例から学ぶ

事例(ケース)について考え、他の人と検討し、
自らの解決策を出す

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

11

1) 現実的な活動から学ぶ

行動中心主義

具体的な行動を通して種々の課題と取り組み
ながら言語能力を獲得していく



《学習デザイン》

学習の中で**具体的な課題が設定され、それを
解決するプロセスの中で言語能力が獲得される**
ようにデザインされなければならない

『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ 共通参照枠』 欧州協議会

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

12

Task-Based Learning (TBL) から考える

- ・従来型: 教師主導型

文型 → 練習 → タスク(活動)

- ・TBL: 学習者中心 (Willis & Willis 2006)

タスク → タスクで使用された文型や
表現に関する教師FB → さらなる表現練習

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

13

Task-Based Learning (TBL)

- ・TBL とは、学習者に達成させるべき課題(タスク)を与え、その課題達成のための道具として日本語を使わせ、**日本語を使用する過程を最大限に利用して**実践的運用力を育成しようとするアプローチ。
- ・与えられたタスクを完成させることが第一義
- ・Task-based Language Teaching

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

14

学習活動デザイン 例

1. 情報収集(基本情報) **Part I**
 - L1. 企業の求める人材を知る**
2. 課題抽出・整理
 - L2. 企画を立てる**
3. 情報収集(調整)
 - L3. 居酒屋でコミュニケーションを図る**
4. 分析・戦略
 - L4. 企画を具体化する**
5. 伝達・実行
 - L5. プレゼンテーションをする**
6. 情報収集(一般情報) **Part II**
 - 新聞記事から情報を収集する**

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

15

就職活動



企業調べ
陳さんの自己アピール
人事部評価
自身の自己アピール作成
ピアフィードバックへ

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

16

企画を立て具体化し プレゼンテーションする

- ・スパイラルに活動をデザイン

Lesson2 企画会議: 企画を立てる
Lesson3 居酒屋で相談をする
Lesson4 企画を具体化する(SWOT分析)
Lesson5 プレゼンテーションをする

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

17

SWOT分析

- 組織や製品の**強み・弱み・機会・脅威**を把握するための分析
- Strength・Weakness・Opportunity・Threat
- 1960年代スタンフォード大学のアルバート・ハンフリーにより考案された
- 企業が戦略や計画を策定するためには、内部環境(経営資源)と外部環境(経営を取り巻く環境)の分析が必須である。SWOT分析は両者を統合的に行える
- 討議しながら、問題点を共有化できるのも利点である

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

18

L4. 企画を具体化する

語彙と表現			
単語	意味	読み方	英訳
SWOT分析	Strengths and Weaknesses analysis	すわうとふんぶん	SWOT analysis
会社	company	がいしゃ	company
環境	environment	かんぎょう	environment
事業	business, enterprise	じぎょう	business, enterprise
経営環境	business environment	けいえいかんぎょう	business environment
内部要因	internal factor	ないぶよういん	internal factor
強み	strength	つよみ	strength
弱み	weakness	よわみ	weakness
外部要因	external factor	がいぶよういん	external factor
機会	opportunity	きかい	opportunity
脅威	threat	きょうゐ	threat
要素	element, factor	ようそ	element, factor
決定	to decide	けつぎ	to decide
徹底的に把握する	to have a thorough understanding of	もうりてきにわさつ	to have a thorough understanding of
フレームワーク	framework	ふらむわーく	framework
頭文字	capital letter, initial letter	かぶみじ	capital letter, initial letter
縦軸	vertical line	たてじく	vertical line
横軸	horizontal line	よこじく	horizontal line
プラン要因	plan factor	ぷらんよういん	plan factor
マインド要因	mind factor	まいんよういん	mind factor
マテリアル	material	まてりある	material
経営環境	management environment	けいぎやかんぎょう	management environment
検討する	to consider	けんこうする	to consider
各要素	each element, each factor	かくようそ	each element, each factor
組み合わせ	to combine	くみあわせる	to combine
以下	below	いぎや	below

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

19

Task 3

グループ4人組のメンバーが各々の企業をSWOT分析して、その中から1つを選び、その企業についてプレゼンテーションを行います。各々の企業について、その企業の特徴、強み、弱み、機会、脅威を説明してください。

Task 4

各々の企業について、その企業の特徴、強み、弱み、機会、脅威を説明してください。

チャレンジ 1

各々の企業について、その企業の特徴、強み、弱み、機会、脅威を説明してください。

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

20

“チャレンジ1” ここが重要

- 学習者自身が関心のある企業や商品を選ぶ
選択のポイントは何？
- 学習者が情報収集をする
どのようなリソースにアクセスが可能？
- 議論をし、戦略を立てる
議論の仕方は？ 戦略の絞り方は？
- 分析力は、マーケティングや営業部でなくても
仕事に必要な

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

21

SWOT分析の結果をプレゼンする

- Lesson5 プレゼンテーションをする
SWOT分析で立てた戦略を、どのように
プレゼンするか。
- PPTを実際に見ながら音声を聞く。
スクリプトやDVD-ROMで学習を補強。

↓
学習者自身の発表へ

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

22

Cds ポートフォリオの例(自己評価と記録)

セルフアセスメント	
0 (できない) , 1 (難しければできる) , 2 (簡単にできる) , 3 (自信を持ってできる)	
第1課 企業家の人材を知る	0-1-2 (自信を持って)
1. 企業家の人材を知る。自分自身が企業家の人材かどうかを判断できる。	☐
2. 企業家の人材を知る。自分自身が企業家の人材かどうかを判断できる。	☐
3. 企業家の人材を知る。自分自身が企業家の人材かどうかを判断できる。	☐
4. 企業家の人材を知る。自分自身が企業家の人材かどうかを判断できる。	☐
5. 企業家の人材を知る。自分自身が企業家の人材かどうかを判断できる。	☐
6. 企業家の人材を知る。自分自身が企業家の人材かどうかを判断できる。	☐

言語的・文化的
体験の記録
(生活・学習・職場)

自分が考えた
「～できる」を
記録する

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

23

2) 事例から学ぶ: ケース学習

事実に基づく**ケース**(仕事上のコンフリクト)を
題材に、設問に沿って参加者が協働でそれを
整理し、時には疑似体験をしながら**考え**、**解決**
方法を導き出し、最後に一連の過程について
内省するまでの学習



Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

ケースメソッドとは

- ・ハーバード大学のビジネススクール: 経営判例(ケース)をもとに討論する授業がもと
- ・ケースメソッド教育(case method of teaching, case method of instruction)
- ・実際に生じたコンフリクトや問題点が教材
- ・現在、ビジネススクール、途上国への開発支援や食品流通に関する大学院の授業でも実施
- ・日本語教育: 「協働の概念をもつと考えられる学習方法」(池田・館岡2007)として紹介

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

25

ケース学習の設問例

- (1) それぞれの気持ちを考えてみましょう
- (2) この状況で何が問題だと考えますか
- (3) あなたにも似た経験がありますか
- (4) あなただったら、このような場合どのように行動しますか
- (5) 相談された場合、どのようなアドバイスをしますか

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

26

ケース活動の実践例

- ① オリエンテーション(5分)
- ② ケースを読みタスクシートに自分の意見を記入(10分)
- ③ 用意された設問に基づき、グループで話し合う(30分)
- ④ クラス全体で意見交換や議論をする(40分)
- ⑤ 個人で一連の活動を振り返り、内省シートに記入する(5分+宿題)

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

27

ケース活動で生じる主な学び

- (1) 問題の所在を把握する
- (2) 人物の立場に立って考える、自分の経験・自文化と照合する
- (3) 討論を通じてそれぞれの「解決策」を見出す
- (4) 活動後の内省を通じて問題解決のプロセスを再確認する

(近藤・金2010)

Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

28

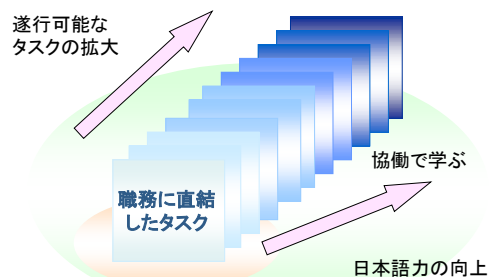
(3) まとめ



Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

29

日本語学習を仕事を学ぶプロセスに組み込む



Copyright©2014 Aya-Kondoh. All Rights Reserved.

30

主な参考文献

池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書
海外技術者研修協会(2008)「日本企業における外国人留 学生の就業促進に関する調査研究」平
成18年度経済産業省委託事業
近藤彩(2005)『ビジネスにおける異文化間コミュニケーションー日本語での会議は非効率か』『講座
社会言語科学1 異文化とコミュニケーション』井出祥子・平賀正子編 ひつじ書房 40-60
近藤彩(2007)『日本人と外国人のビジネス・コミュニケーションに関する実証研究』ひつじ書房
近藤彩 他(2009a)「在印日系企業における日本人側のコミュニケーションに対する葛藤ーインド
人との協調的な関係作りのためにー」『言語文化と日本語教育』第37号、お茶の水女子
大学日本語学研究会
近藤彩他(2009b)「在印日系企業におけるインド人と日本人の仕事上の葛藤と工夫」『2009年度日
本語教育学会春季大会予稿集』
近藤彩・金孝卿(2010)「「ケース活動」における学びの実態ービジネス上のコンフリクトの教材化に
向けてー」『日本語文化研究会論集』6、国際交流基金・政策研究大学大学院
<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/files/ronshu2010/Kondoh%20Kim.pdf>
近藤彩・品田潤子・金孝卿・内海美也子(2012)『課題達成のプロセスで学ぶビジネス・コミュニケー
ションのための日本語』アプリコット出版
近藤彩・金孝卿・ムグダヤルディー・福永由佳・池田玲子(2013)『ビジネスコミュニケーションのため
のケース学習 職場のダイバーシティで学び合う』【教材編】ココ出版
近藤彩編著・金孝卿・池田玲子(近刊)『ビジネスコミュニケーションのためのケース学習 職場のダ
イバーシティで学び合う』【解説編】ココ出版

ジェームス.W.タム他(斉藤彰悟監修訳・池田絵美訳)(2005)『コラボレーションの極意』春秋社
高木晴夫・竹内伸一(2006)『実践！日本型ケースメソッド教育』ダイヤモンド社
堀井恵子(2008)「留学生に対するビジネス日本語教育のシラバス構築のための調査研究ー
中国の日系企業へのインタビュー考察」『武蔵野大学文学部紀要』Vol.10,77-89
Willis, Dave & J. Willis(2007) *Doing Task-based Teaching*. Oxford University Press

●本発表で取り上げた内容は、文部科学省科学研究費基盤研究(C)「ビジネスコミュニケー
ション能力育成のための日本語教材と評価方法の開発に関する研究」(研究代表者:近藤彩)
(平成23年度～27年度)による研究成果の一部である。

<参考>

協働実践研究会
<http://www2.kaiyodai.ac.jp/~orikeda/index2.html>

ビジネス日本語研究会(日本語教育学会S16)
<http://www3.grips.ac.jp/~BusinessJapanese/>

講演 3

上級日本語教育における言語景観を活用した 社会理解教育

磯野 英治

大阪大学国際教育交流センター 特任准教授

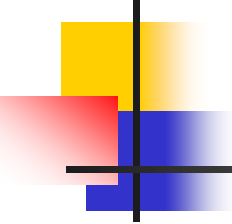
上級日本語教育における言語景観を 活用した社会理解教育

大阪大学 国際教育交流センター

磯野英治

平成26年2月17日(月)

第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会



はじめに①

現在、上級日本語教育では

(1) 技能・スキルの向上やキャリア形成など分野に応じた日本語教育

a. アカデミックジャパニーズ

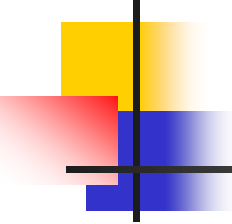
b. ビジネス日本語教育

(2) 日本語で行われる文・理系の教養・専門科目

が行われ、各領域で教育・研究の成果が公表されている。



身近に存在する「日本語そのもの」を素材として活用し、授業を展開する内容重視の上級専門日本語教育に関する観点と実践を報告する。

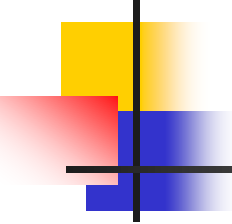


はじめに②

- (1) 看板やポスター、掲示物など身近にある生の日本語(言語景観)を通して、社会の諸特徴に気づく
- (2) かつ大学の研究活動に必要な分析力や考察力を獲得するための上級専門日本語教育



上級レベルの日本語学習者がその言語能力を生かし学生生活の中で建設的、或いは批判的に社会を考察するために必要な観点



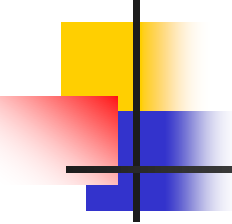
言語景観研究とは？

- (1) 公共空間の文字言語
- (2) 自然に或いは受動的に視野に入る文字言語



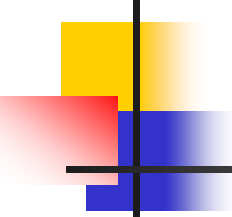
言語景観研究の対象

看板、掲示物、ポスター、ラベル、ステッカー、シール



言語景観研究の広がり

- 国内外の多言語・多文化社会における多言語景観の研究(佐藤・布尾・山下 2006、庄司2007,2009、井上 2007,2009、バックハウス 2009,2010、山下 2010、磯野(2010、2011a、2012)
- 地域文化に関する研究(内山 2010、大西 2010、中井 2010、日高 2010、松丸 2010)
- 少数コミュニティの言語使用に関する研究(金 2005、庄司 2009、朝日 2010、ロング 2010)
- 神社・祠の文字表記など文化人類学、民俗学に関する研究(高岡 2010)
- アジア諸国の言語景観の歴史、現状に関する研究(張 2010)
- 言語景観の日本語教育への応用研究(磯野2011b、2013a,b、磯野・ロング 2012)
- 言語景観の語用論的分析(磯野・ロング 2012)
- 方法論に関する研究(高田 2010)



言語景観に対する観点

1. 諸外国の日本語を中心とした言語景観

(1) 文字表記や語彙、文法的な誤用

(2) 表現の自然さ

(3) 地域性や役割

2. 日本国内の言語景観

(1) 使用意図や問題点

(2) 社会的背景

(3) 地域性

(磯野2011b、2013a,b)

諸外国の日本語を中心とした言語 景観：誤用①

誤字・脱字など表記の誤用



1. 「ホハモソ」→「ホルモン」 2. 「ご賢下さい」→「ご覧ください」 3. 「マツユマロ」→「マシュマロ」

諸外国の日本語を中心とした言語 景観：誤用②

文法的な誤用



4. 「お送ります」→「お送りします」



5. 「本物の日本味」→「本物の日本の味」 8

諸外国の日本語を中心とした言語 景観：表現の自然さ

コンテキストに合った表現の選択



6:「わるいけど」→「申し訳ありませんが」



7.「チムジルバンで」→「チムジルバンと」 9

諸外国の日本語を中心とした言語 景観：地域性や役割①

各国の公共表示



8. 日本の公共表示



9. 韓国の公共表示



10. 中国の公共表示



11. インドネシアの公共表示

諸外国の日本語を中心とした言語 景観：地域性や役割②

韓国における外に向かった国際化と内なる国際化・多民族化



12. 観光地明洞の多言語景観



13. 日本人集住地区東部二村洞における動物病院の言語景観

諸外国の日本語を中心とした言語 景観：地域性や役割③

インドネシアバンドンのショッピングモールにおける日本語の言語景観



14. ファッション性



15. 先進性



16. 日本語をアクセサリー
のように活用

日本国内の言語景観 : 使用意図や問題点①

字義通りに解釈できない例(禁止文)



17. 表現形式と機能がずれている例①



18. 表現形式と機能がずれている例②

日本国内の言語景観

: 使用意図や問題点②

文字や単語、短い文の中に様々な意味が含まれている例



19. 記号論的に意味が含まれているもの①
「和・洋」に内包された様々な意味



20. 記号論的に意味が含まれているもの②
「24h(⇒24hr. 24hrs.)」という日本独特の表記¹⁴

日本国内の言語景観 : 社会的背景①

様々な解釈が可能な例

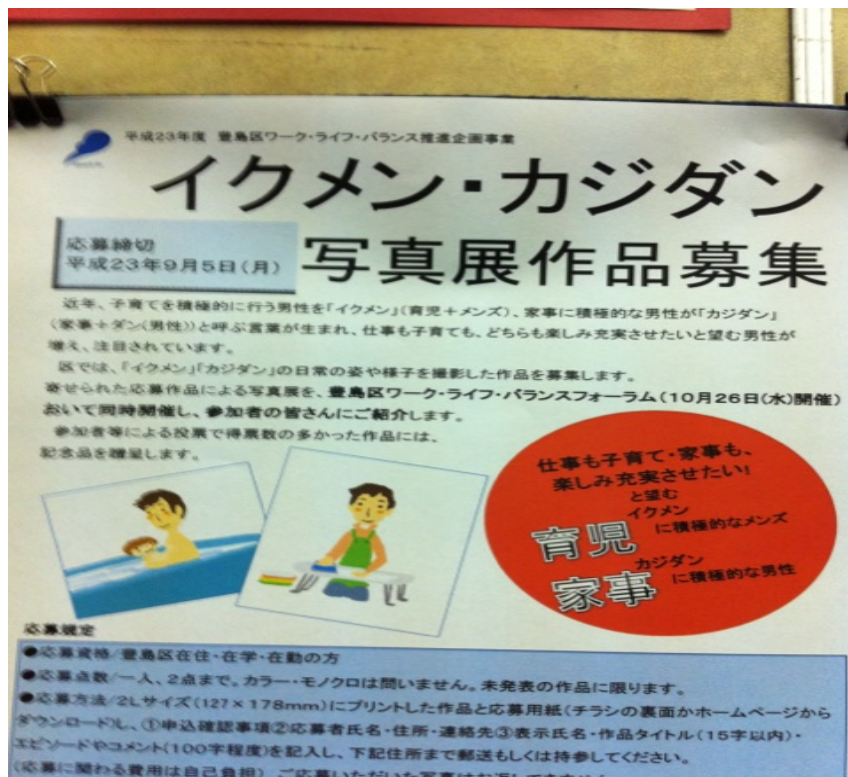


写真21. ジェンダーの観点



写真22. 誰に向けた言葉か

日本国内の言語景観 : 社会的背景②

様々な意味が含まれている例

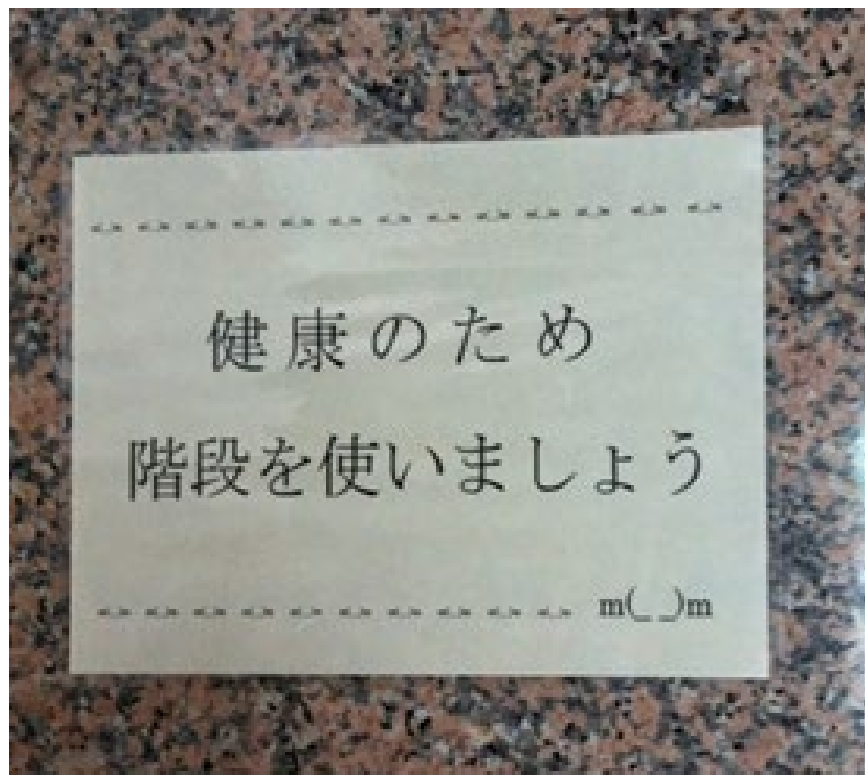


写真23. 震災と節電



写真24. 政策と与那国島の思惑

日本国内の言語景観

: 地域性①

身近に存在する方言への気づき



写真25. 文レベルの方言活用



写真26. 語彙レベルの地域性や言語変化

日本国内の言語景観

: 地域性②

地域の特色のある言葉への気づきと考察



写真27. 与那国方言の併記と
アイデンティティ



写真28. 小笠原混交言語における
時間軸の違いと島時間の存在

海外高等教育機関での授業実践①

授業実践1: Bさんのレポート



韓国における日本語の言語景観

この文章は文法的には間違っていないが、客を彼女(女優)に比喻したいのなら「まま」を使うより、「～みたいに」もしくは「～ように」を使用する方がより適切だと思います。

適切な文章→

彼女のように、輝く。

彼女みたいに、輝く。

海外高等教育機関での授業実践②

授業実践2:Pさんのレポート

変な日本語



この写真には「20分ならできます」とあります。しかしここは眼鏡屋なので、「～なら」は相手に要求しているようです。もし、お客様に情報を伝えたいのであれば「20分間でできます」「20分あればできます」「20分間からできます」はどうでしょうか。
（「視力」も日本で普通に使われているものではないです）

海外高等教育機関での授業実践③

授業実践3: Kさんのレポート



不自然な表現

生フルーツジュースを売っているカフェの看板です。その場で果物をおろして作ったジュースだと言うのを強調するため、「生果であるジュース」と示したようです。まったく間違っている表現ではありませんが、果物がそのままであるような感じがします。

国内高等教育機関での授業実践



考えてみよう

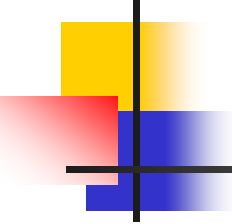
左の写真から何がわかりますか。

「日本を休もう」とはどういう意味でしょうか。



言語景観を活用した日本語教育： 目標・レベル・体制

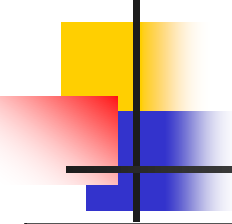
教育目標	(1)社会理解教育 ①身近にある日本語(言語景観)を通して社会の諸特徴や多様性に気づき、大学で学ぶための分析力や考察力獲得すること。 ②日本語学習者がその言語能力を生かし実生活の中で建設的、或いは批判的に考察した結果を論理的に表現できるようになること。 (2)日本語教育 ①②の中で行われるディスカッションとレポートの作成、発表を通じて、大学生活で必要なプレゼンテーション能力とライティング能力が身につくようになること。
対象・レベル	①上級(500以上)レベルの熟達日本語使用学習者 ②上記と日本人学生の混合クラス
教員の体制	①言語学の基礎的な知識を有する日本語教師 ②日本語教師と言語学を専門とする教師のチームティーチング



言語景観を活用した日本語教育： 教育内容

テーマ	内容	難易度 (i→iii)
1. 文字語彙や文法の自然さ、誤用、多様性に気づく	誤用、揺れのある表記、単語のバリエーションや文字種	i
2. 地域性や役割に気づく	日本の公共表示の理解と外国(自国)との比較、民間表示の多様性	
3. 使用意図や問題点に気づく	字義通りに解釈できない語彙・文や、日本文化特有のピクトグラム(鯨・○×△など)、方言使用	ii
4. 社会的背景や状況に気づく	ジェンダーなどの言語意識、日本文化特有の表現や語彙の選択	iii

全15回

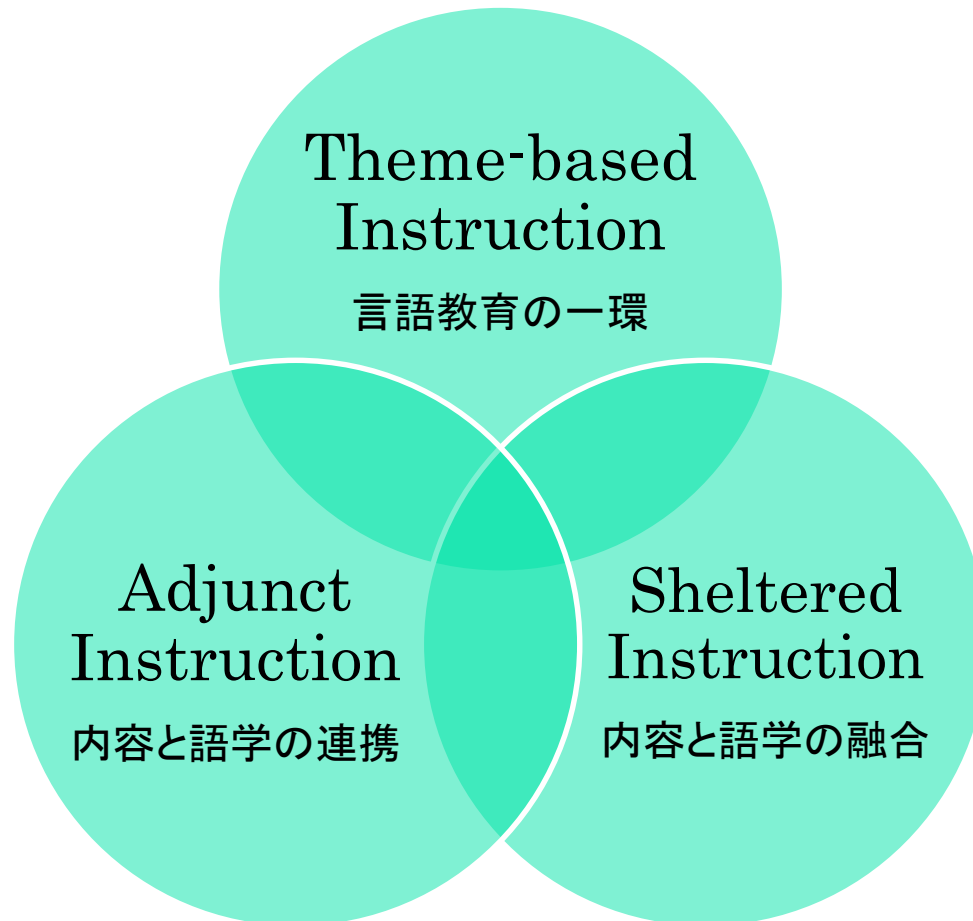


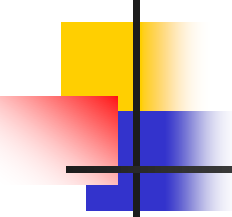
言語景観を活用した日本語教育： カリキュラム

学期の流れ(全15回)	活動
1. 言語景観への理解(3回)	講義、グループワークによるディスカッション、 自国の事情に関する発表資料作成(スクリプト)
2. 各テーマ別の復習とプレゼンテーションの方法の理解(6回)	講義、データ収集とグループワークによる発表資料の作成(スクリプト・パワーポイント資料)と中間発表会
3. 各テーマに沿ったレポート作成手順の理解(6回)	データ収集とグループワークによる発表資料の作成(スクリプト・パワーポイント資料)、配布レポートの作成、期末発表会
<u>一回あたりの大まかな流れ</u> テーマ別言語景観小テスト⇒該当内容の講義と質疑応答⇒グループワークによる既習項目についてのディスカッション・各資料作成⇒課題の提示(フィールドワーク)	

CBIと言語景観を活用した日本語教育：どのモデルと関連するのか

Three Prototype CBI Models (Brinton2007)





まとめ

- (1) 学生各自の学術的な研究活動を強く支える批判的、建設的思考力の養成
- (2) 周囲にある日本語から日本社会の事象を理解し、適切な言語行動が選択できるスキル養成



副次的な基礎力の養成と日本語教育の組み合わせ



参考文献①

朝日祥之(2010)「移住の言語景観－外地:サハリン・北海道に焦点をあてて－」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景観・日本の言語景観』、富山大学人文学部、27-31.

磯野英治(2010)「日本海を渡った日本語の言語景観－韓国各都市における現状－」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景観・日本の言語景観』、富山大学人文学部、20-26.

——(2011a)「韓国ソウルの国際化・多民族化に対応する多言語景観」『日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム 多言語化する「地方」予稿集』、富山大学人文学部、18-21.

——(2011b)「韓国における日本語の言語景観－各都市の現状分析と日本語教育への応用可能性について－」『世界の言語景観・日本の言語景観(仮)』、かつら書房、74-95.

——(2012)「言語景観から読み解く多民族社会－韓国ソウル特別市における外国人居住地域からの分析－」『日本語研究』32号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、191-205.



参考文献②

- (2013a)「言語景観に注目した社会的背景・地域性の分析と日本語教育への応用」『2013年度韓国日語日文学会春季学術発表大会予稿集』、韓国日語日文学会、157-161.
- (2013b)「言語景観を日本語教育に応用する視点」『日語日文学研究』第86集、韓国日語日文学会、289-302.
- 磯野英治・ダニエル ロング(2012)「言語景観の語用論的分析ー非母語話者の視点を取り入れた試験的研究ー」『日本語学会2012年度春季大会予稿集』、日本語学会、241-246.
- 磯野英治・丁美貞・佐々木未華・Anisa Arianingsih・Eka Mahtra Khoirunnisa・Rekha Della Fitrati(2013a)「言語景観にみるインドネシアの日本語の現状と役割」『日本語研究』第33号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、113-122.
- 磯野英治・引田梨菜・豊國祥子・李恵・Andina Permatawaty・Astiya Hadiyani・Wistri Meisa・Sustia Fattiska・Rosi Rosiah(2013b)「首都東京におけるインドネシア語の言語景観の展開ー公共表示・民間表示に注目した事例調査ー」『日本研究』Vol.34、韓国 中央大学校日本研究所、343-356.



参考文献③

井上史雄(2007)「多言語表示の経済原理」『社会言語科学会 第20回大会発表論文集』社会言語科学会、255-256.

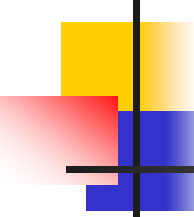
——(2009)「経済言語学からみた言語景観—過去と現在—」『日本の言語景観』、庄司博史・ペート バックハウス・フロリアン マルクス編著、三元社、53-78.

内山純蔵(2010)「景観形成の地域性とプロセス」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景観・日本の言語景観』、富山大学人文学部、4-7.

大西拓一郎(2010)「都市特性と言語景観—大阪駅前と京都駅前の比較から—」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景観・日本の言語景観』、富山大学人文学部、46-56.

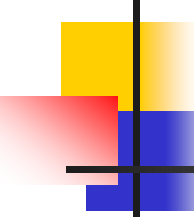
金美善(2005)「言語景観にみえる在日コリアンの言語使用」『在日コリアンの言語相』、真田信治・生越直樹・任榮哲 編、和泉書院、195-224.

佐藤誠子・布尾勝一郎・山下仁(2006)「大阪における多言語表示の実態—まちかど多言語表示調査、外国人へのアンケート調査、行政・鉄道へのインタビュー調査から—」『言語の接触と混交—共生を拓く日本社会—』、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」報告書.



参考文献④

- 庄司博史(2007)「日本社会の多言語状況 一何がかわったのか、何かわるのか」『明海大学大学院応用言語学研究』No.3、33-48.
- (2009)「多言語化と多言語景観—多言語景観からなにがみえるか」『日本の言語景観』、庄司博史・P. バックハウス・F. クルマス編、三元社、17-52.
- 庄司博史・ペート・バックハウス・フロリアン・クルマス 編著(2009)『日本の言語景観』、三元社.
- 高岡弘幸(2010)「社会分析ツールとしての言語景観」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景観・日本の言語景観』、富山大学人文学部、80-87.
- 高田智和(2010)「言語景観を分析し、可視化するには」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景観・日本の言語景観』、富山大学人文学部、67-71.
- 張守祥(2010)「中国(黒竜江省)における文字景観」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景観・日本の言語景観』、富山大学人文学部、14-19.



参考文献⑤

中井精一(2010)「言語景觀にみる日本の「地方」」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景觀・日本の言語景觀』、富山大学人文学部、57-62.

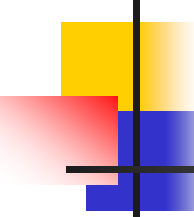
日高水穂(2010)「「泉都」別府の言語景觀－「路地裏散歩」の現場から－」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景觀・日本の言語景觀』、富山大学人文学部、32-40.

ペート・バックハウス(2010)「言語景觀から読み解く日本の多言語化－東京を事例に－」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景觀・日本の言語景觀』、富山大学人文学部、63-66.

松丸真大(2010)「都の言語景觀－京都市中心部のちょうちんに注目して－」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景觀・日本の言語景觀』、富山大学人文学部、41-45.

山下暁美(2010)「外国人集住都市の言語景觀-言語表示サービスの現状-」明海大学外国語学部論集 第22集、17-34.

ロング・ダニエル(2010)「世界の少数言語の言語景觀に見られるアイデンティティの主張」『平成21年度日本海総合研究プロジェクト研究報告 国際シンポジウム 世界の言語景觀・日本の言語景觀』、富山大学人文学部、80-87.



参考文献⑥

Donna M. Brinton (2007) Content-Based Instruction: Reflecting on its Applicability to the Teaching of Korean 12th Annual Conference American Association of Teachers of Korean, Chicago, Illinois 2007.

(http://docs.google.com/viewer?a=v&q=cache:xscH1YckcnkJ:www.aatk.org/www/html/conference2007/pdf/Donna%2520Brinton.pdf+Brinton+CBI&hl=en&gl=us&pid=bl&srcid=ADGEESg73pVXy-9w1AFR75RJksAwRPUIYahoku42TNrRRL5HPAExO7hVUd4f0kwiS7eZVrJmVHZAcOIN55Sp3eVLCDmSzlUQHqT7hUN6Ki_BrbySyoYNpD5kHuZRtkPUgofbvjDy2Auk&sig=AHIEtbRKQ6Tz_AW63M0qL2TYt3WknhGOtw&pli=1)
(July 2011))

全体討論

上級専門日本語教育の今後の展開に向けて

全体討論：上級専門日本語教育の今後の展開に向けて

司 会：横井先生から CBI を用いた上級日本語教育へのお話、近藤先生からビジネス日本語教育への理念と実践、磯野先生から言語景観を活用した思考力・分析力についてお話しいただきました。内容は多岐にわたるかと思いますが、専門日本語教育にどのようなヒントを与え、貢献ができるか、再度簡単にまとめてお話しさせていただきたいと思います。

横 井：普段はロシア語教育をやっておりますが、上級学習者への日本語教育に参考になるものとして、今回は学習者の学習プロセスのプランニングについて提示しました。上級学習者ならば批判的に分析して日本語で表現できますが、もう少し下のレベルでは、分析に必要な語彙や表現に必要な文法項目をプランニングに含めながら、分析や思考の方法を示すことが必要です。それを積み上げて、最終的には自分の考えを表現できるように道筋をつけます。その点で、CBI のレッスンプランはご参考になるのではないのでしょうか。

近 藤：留学生に対しての日本語教育の観点から話しますと、専門を生かして企業で十全な参加ができる日本語を指導することが専門日本語教育だと考えています。コミュニティでも同じだと思いますが、その人の自分らしさを生かして、時には企業人として、日本に住む生活者として、日本語を手段として参加するための基礎的な力を身につけるのが専門日本語教育であると思います。先ほどはビジネスの切り口で話しましたが、本来は、人としての社会への参加を応援したいと考えています。

磯 野：専門知識を生かすことは非常に重要になると思います。企業や、更にはコミュニティの中でどう生きるかを教えることは必要です。そして、その過程の中で、テクニックやスキルだけではなく、分析・思考・考察をどう教育するかが重要で、それこそを教育するべきだと思います。

司 会：これらのことをふまえて、フロアから何かご質問いただけますでしょうか。

フロア 1：横井先生にお伺いします。CBI と CLIL についてですが、たとえば上智大学では CLIL という言葉を使っているようです。この二つに何か本質的な違いはあるのでしょうか。

横 井：CBI は北米のイマージョンプログラムが発端になり 1965 年前後から発生したもので、CLIL の方はヨーロッパの複言語主義を背景にして 1990 年ごろから発展したものです。双方の研究者の見解や著書を参考にしたところ、コンセプトに少しの違いはあるものの、基本的には変わらないと思います。ただし、ヨーロッパの CLIL の場合は、EFL、英語教育が多く、それは実証研究においても同様です。日本でも同様ですが、学習時間が多く開始時期が早い英語と、第二

外国語とは学習環境がまったく違うと言えます。その分、北米の CBI の方が、ESL やイマージョンなど、様々なコンテキストでの報告が実証研究として行われているため参考になると思います。ただ、今回ご紹介したような、低次の思考から高次の思考へと段階を経て活動をデザインするという点では、大差はないというのが個人的な感想です。

司 会：他にご質問はございますか。

フロア 2：私の大学の留学生のうち、就職活動や専門教育などの影響で日本語学習のモチベーションが下がっている学生がいます。先生方の活動の中で、負荷が高いタスクを与えた際の学生の反応はいかがでしょうか。関心を示していますか。

磯 野：私の実践においては、日常生活の中での面白いことや不思議なことを提示することにより、知的好奇心を刺激することはできていると思います。活動内容によりますが、学習者の好奇心を刺激する活動が必要だと思います。

近 藤：SWOT 分析を例にすると、N 3 レベルの学生がいた場合には負荷が非常に大きくなると思います。グループの中でレベル差がある場合は、ゴールを下げたりもします。また、あきらめかけるような学生には、小さな達成感を与えるようにしています。しっかりした SWOT 分析はできなくても、たとえば自分の国のことについて自分らしい内容を話すことなどによってモチベーションを何とかキープできるのではないのでしょうか。

横 井：私の専門のロシア語教育では、ロシアの政府系資料を取り上げ、グラフを見る、比較する、考察するというように、学習者のレベルに合わせて統計資料の分析らしきものをやっています。同僚の先生も、同様の実践を行ったところ、学生の反応はよかったそうです。第二外国語の授業ですので、日本における日本語教育とは話が違うかもしれませんが、磯野先生のように、生のテキストを授業で実際に使うことも、モチベーションにつながる一つの方法だろうと思います。

司 会：CBI の中で、モチベーションの維持につながるような点はありますか。

横 井：ミネソタ大学の教材の優れた点は、語学で必要な繰り返しの一つ一つがすべて言語活動になるようにデザインされている点です。CBI は本来、子どもに向けたものである場合も多いです。そこでは、まず挿絵を見て、自分たちが知っているもので語彙リストを作り、知らないものを読んでわからないものを調べるといように、お話のテキストを読む前の準備も言語活動として計画されています。語彙リストを自分たちで作成し、挿絵を見てお話の内容を事前に想像し、そこで必要な語彙を教師が教えるという、細かいプランニングにプロの技のようなものがうかがえます。

フロア 3：最終的な評価方法についてお聞きしたいと思います。

横 井：理想的には形成的評価と総括的評価との 2 つがあると思います。私自身は、学生のプレゼンテーションを見て総括的評価をしています。例えば、旧ソ連諸国

について統計的に分析して発表しなさい、などです。それまでに、日本とロシアの統計資料を使って、表現や語彙は学んでいるので、内容や考察部分をルブリック形式で学生にあらかじめ提示して、それを指標にして学生が発表します。一方、形成的評価はあまりしませんでした。ただ、エッセイを書く宿題はかなり出したので、それが形成的評価につながる面はあります。理想的には、スライドでもご紹介した IPA (Integrated Performance Assessment) を使うのがよいと思います。

近 藤：上級日本語の場合は、評価をわざと毎回変えています。例えば先学期は、単語などの表現・語彙のクイズを 10~20%、パフォーマンスの課題を 50~60%、出席率を 20%とし、その他に内省シートの提出と変化で振り返りをしています。これは固定的なものではなくて、学生の取り組み方を見ながら決めます。最初カリキュラムに基準を出しますが、実際は多少重みを変えることもあります。特に内省シートの提出がよくない場合は、それを成績に加えることもあります。しかし、成績というと、教師に気に入られるように書くこともあり、その場合は成績に加味しないようにしたこともあります。試行錯誤は必要です。

磯 野：グルーピングしてのグループワークとディスカッション、発表資料作成、中間テスト、スクリプト作成、PPT 資料作成などをします。また、スクリプトとは別に、聞く人向けのレポートを書きます。書き言葉についてはそれらを参考に評価します。もちろん、内容も考慮します。例えば、グループによって取り組みに差が出てきて、明らかに楽をするグループもあります。簡単な誤用ばかりを取り上げて発表するグループもあり、それは問題です。そのため、難しさで 3つのレベルに分けて、それぞれについて必ず発表させる、などします。加えて、テーマ別にこちらで用意した言語景観についての小テストを初めに行って、定着を図ります。

近 藤：補足ですが、先ほどの評価は企業向けの研修のものです。大学院では単位は付与しないので、個人に評価をフィードバックしています。

フロア 4：磯野先生のご発表の公共の場でのポスターなどを興味深く拝見しましたが、ポスターやラベルは、公共の場であってもターゲットが決められているケースが多いと思います。先ほどの国際化を呼びかける空港の写真などもそうですね。ポスターなどに対し、対象は誰かということ、授業の中ではどう扱うのでしょうか。特に気になったのは、スライド 22 の「日本を休もう」です。私は日本人で長く日本に住んでおりますが、それでも、このターゲットは大変難しいと思います。上級の日本語学習者ではありますが、学生に何を期待して、学生はどのようなリアクションが可能なのでしょうか。それと同時に、学生の何をどう評価するのでしょうか。大きく認知言語学に関わる分野だと思いますが、メタファーや思考の分野を開拓する際に評価は大きな課題になると思います。その

点はいかがですか。

磯 野：認知言語学かどうかは微妙ですが、社会言語学的なこうした事象がコンテキストにあっているか否かは、学習者の母国にも見られるユニバーサルなものです。したがって、日本語の特徴としての有無ではなく、これをどう見ればよいかという考え方をします。今回のデータが日本語なので日本語が強調されていますが、身に付けるべきなのは観点です。観点、次元、内容というレベルの問題です。それを日本語の材料を紹介しながら考えます。その後の評価の問題は非常に難しいです。日本語を使ってディスカッションした上で、レポート作成につなげるという作業がありますが、その際、日本語と内容のバランスを見ます。プレゼンでは書くことと話すことを総合的に評価します。レポートでは書き言葉が中心になりますので、日本語と内容を評価します。評価基準では、マークシートを使って点数を統計で出すというようなことはしていません。

司 会：分析能力、問題解決能力の開発と、日本語能力の開発がどう関係するかということが議論になっていますが、その点はいかがでしょうか。日本語能力を伸ばすことによって、分析能力や問題解決能力が本当に伸びるのでしょうか。

フロア5：近藤先生のスライド8に「教師は仕事の現場に目を向ける」とありますが、それでは我々は仕事をしていないのか、ということになります。これは、ビジネスオリエンティッドに仕事をしていないということだと思いますが、ビジネスオリエンティッドとは、スライド6にある課題達成能力、問題発見解決能力と言えます。企業活動は競争ですから勝つことが重要で、そのためにグループで取り組まなければなりません。様々なケースに取り組んだり、プロセスを経験することを通して、ビジネスアクティビティのランドスケープを知れば、「全体の中で今これをやっている」ということが認識できて、適切な仕事ができると思います。そして、ケースで学ぶということで他者との調整という能力をつけることができると思いました。ロシア心理学では、活動と言語は相即的な関係で切り離せません。したがって、課題解決的に活動できる人は課題解決的な言葉遣いができると思います。

近 藤：おっしゃるとおり、ビジネスオリエンティッドな仕事に目を向けて教育ということですね。教師養成の研修をする際に、企業の人に会ったり卒業生に会ったりしてヒアリングができるわけではありません。したがって、日本語教師が外に出てヒアリングをするのはもちろん重要ですが、先生方が仕事をする中での会議のやり方、メールのやり取り、遅延への対応などを振り返って、教室での教育にリンクさせればよいと思います。そして、ランドスケープという点では、学生が直面する問題をできるだけ扱ったほうがよいのではないかという点と、両方の意味があります。

横 井：ヴィゴツキーや活動理論についての補足ですが、CBIやイマージョンの研究者

は、Sociocultural Theory を用いていて、ヴィゴツキーの理論や活動理論の提唱者も多いです。理論的に大変なじむからです。言語を使うことそのものが思考であると言われていています。生のテキストを使うことも同様ですが、言語活動をいかに授業の中で実現させるかが教師としての勝負ではないかと思います。

磯 野：生の教材は一つのキーワードだと思います。いかにリアルワールドと教室を近づけるかということです。そこには2つの観点があると思います。生か生ではないかという問題と、教材を使ってそれを自分の中にとりこめるか否かという観点です。CBI、CLILにおいては、生の教材を使ってリアルワールドに近づけるという話でしたが、何かを使って自分の言語活動として自分の中に獲得したものを表現できるということと、教材が生かどうかとを分けて考える必要があります。今日のお話では、リアルワールドに近づけるために生教材、素材、リソースが必要だということが中心なので、それをコンテンツとしてどう組み立てるかという議論が必要です。

近 藤：CBI は、もともとは教科学習から始まったので、その点でビジネスを見越したものと大きく違います。昔、日本語教育の修士課程のモンゴル人留学生に『ごんぎつね』をイメージで教えたことが、それは、『ごんぎつね』を理解するための国語教育の中でのイメージングプログラムでした。今日お話ししたビジネスは教科とは大きく異なり、仕事という実務です。したがって、リアルワールドをなるべく教室活動に生かそうという点で、方法、テクニックとしては共通する場面もありますが、CBI とは異なります。

司 会：リアルワールドと専門日本語教育を結びつける際、日本語教員と専門教員との協働、コラボレーションがよく話題になります。それをうまくやる方法はあるのでしょうか。実践等がございましたら、フロアからもぜひご発言ください。

フロア6：専門教員と日本語教員のコラボレーションについては長らく議論されてきました。日本語教員の方から、専門分野で使われている日本語自体を分析するアプローチとその研究成果はすでに多く蓄積されています。対象を絞って学部生や大学院生への教育について考えると、ビジネス日本語教育は狭義のビジネスのための日本語の教育というより、社会人になるための大学から社会への橋渡しの教育だと言え、それが日本語教員と専門教員の接点になる部分だと思います。大学教員は専門分野を問わず、分析力や思考力を学生に養成しようとしてきました。社会に出るということを考えれば、近藤先生のご講演で言及されていたように、社会では問題解決のための正解が一つではないことについて考え、それを検討して思考を深めるということが重要なのだと思います。したがって、今回のように、研究と教育をしていく同じ立場の大学教員がキャリアを支援するという点では、教員間の共通点や接点が見出せると思います。

近 藤：ビジネス日本語教育というと、「日本語」を教えていると思われがちです。私は

「ビジネス日本語教育」という名前に反対で、「ビジネスコミュニケーション教育」などの方がいいと思います。日本語教育というと、企業の方の中には「敬語の教育」などに矮小化してしまう人もいらっしゃいます。ですので、私は企業に行くときは、「日本語教育」という言葉を使いません。職場でのビジネスコミュニケーションだということを強調します。

フロア 7 : 今の近藤先生のお話は非常に重要だと思います。近藤先生の本のメインタイトルにも「日本語」は入っていません。ビジネスコミュニケーションとおっしゃっています。英語でも“**Speak business.**”と言って、仕事らしく話すことを求められます。ビジネスコミュニケーションとはそれを訓練するということで、その言語がたまたま日本語だということになるのだと思います。教える言葉づかいは、ビジネスらしい言葉づかいであり、ビジネスオリエンティッドな活動の仕方の中での言葉づかいです。それは、ある意味でユニバーサルな日本語だと思います。近藤先生が、ビジネスコミュニケーションという普遍的な日本語の方向性を目指していらっしゃるのことがわかりました。

司 会 : 最後にお一人だけいかがでしょうか。

フロア 8 : 先ほど、教養教育と日本語教育の關係に CBI がいかに関わるかというお話がありました。80 年代、90 年代にカリフォルニアで CBI が盛んに言われていたのには、言語教育が教養教育の一部でなければならないという考え方が背景にあります。したがって、言語教育においてもアカデミックな教育をしなければなりません。そのため、内容を基盤とした言語教育を求められてきました。学部のミッションが、クリティカルシンキングを育成することならば、それは何語教育であれ、クラスの中でなされなければなりません。日本でやりにくいと思う点は、日本語教育が、単位が出ない、成績に関係ない、エクステンションのような位置づけになっている場合が多いということです。コンテンツベースでやろうとすると、学生の方が保守的で「文法をやってほしい」などの要望もあり、こちらの意欲がそがれます。しかし、批判的能力や分析能力の教育は、すべての教員がやらなければならないことだと思います。ですから、それをコンテンツベースでやりたいと考えています。CBI と銘打っている方は少ないですが、よく見ると協働学習や専門教育などを通じてみなさん CBI をやっていたりします。したがって、考える力を養う、対話によって知を構築する、クラスが終わった後に内容が学生の頭に残るようならば、それは CBI だと思います。日本でも様々な CBI 教育の実践が行われているのだろうと考えています。

司 会 : 心強いお言葉をいただきました。議論は尽きませんが、時間ですので、全体討論を以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

協議会風景



横井先生の講演（1）



近藤先生の講演（1）



近藤先生の講演（2）



磯野先生の講演（1）



磯野先生の講演（2）



横井先生の講演（2）



全体討論風景



付録：過去の大阪大学専門日本語教育研究協議会の開催状況

1. 第1回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「大学院レベルの専門日本語教育とは何か」
日時：2007年3月13日（火）13：00～17：50
場所：吹田キャンパス IC ホール 留学生センター2階 Room 5 & 6
2. 第2回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「大阪大学における専門日本語教育のさらなる定着に向けて
一留学生・指導教員とのディスカッションを通して一」
日時：2009年3月10日（火）13：00～17：30
場所：吹田キャンパス IC ホール 留学生センター2階 Room 5 & 6
3. 第3回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「専門日本語教育におけるライティング能力の養成
一留学生と日本人学生の双方に対する教育の共通課題一」
日時：2010年3月9日（火）13：00～17：30
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1
4. 第4回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「キャリア形成につながる専門日本語教育を考える」
日時：2011年3月8日（火）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1
5. 第5回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「日本語教育のスタンダードの課題と展望」
日時：2012年2月15日（水）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1
6. 第6回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「研究留学生のための専門日本語教育を考える」
日時：2013年2月19日（火）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1

第 7 回大阪大学専門日本語教育研究協議会
報告書

2014 年 2 月 28 日 発行

発行：大阪大学国際教育交流センター

<http://www.ciee.osaka-u.ac.jp>

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1－1
TEL/FAX: 06-6879-7109